資料 4

教育長コラム　NO２２　　２０１１・７・１７

「長野県北部地震」

平成２３年3月１２日午前３時５９分にマグニチュード６．７震度６強の地震が発生した。東北の大地震の翌日のことだ。その時の激しい揺れと轟音は表現がむずかしい、とにかく「すごかった」としか言いようがない。揺れが収まってもしばらくは身動きができなかった。寝室のドアは全く開かず、テラス側から子ども部屋を通って、妻と二人で二階から降りた。母親もやっと寝室から抜け出すことができ、一階の居間で三人肩を抱き合ったことを覚えている。後で家の中を見ると冷蔵庫の中の物は全て飛びだし、食器類はほとんど割れ、壁のクロスには無数のクラックが入った。重いピアノも１メートルあまり動いて、床に穴をあけた。あってもなくてもいいような物も含め大量の物品が室内を埋め尽くした。親戚の「応援」がなければ家の中の悲惨な状況は今も続いていたかも知れない。そして、今でも皆が無事でいられたことは奇跡であると思っている。

震源は長野県栄村と新潟県津南町が接する信越県境付近で、村立栄中学校がある近辺とされている。本震の後の余震は４時３１分と５時４２分に震度６弱を観測するなど、その夜の１２時までに震度４以上が１８回、震度２以上ということになると１０８回も記録されている。約１０分間隔で震度２以上の揺れに見舞われていたことになる。

村は当日の午前６時に「３・１２栄村震災対策本部」を設置して、午前１１時に秋山地域を除く村内全域の８０４世帯、２，０４２人に避難指示を発令した。避難指示は出されたが野田沢集落、大久保集落がある私の住む中央地区は県道長瀬横倉停線の「かいまわり坂」が寸断され、東部方面にも出られずと一時孤立状態となった。大久保集落と原向集落間の除雪作業が終わって北野天満温泉経由で避難指定のあった栄中学校に到着することができたのは夕方近くとなった。私はこの日から３月２６日までの１５日間、教育委員会事務室で寝泊まりすることになったのである。小滝地区も村道の陥没被害が大きく、車が通れずヘリコプターで北信小学校に避難するといったハードな状況だったらしく、直に産休にはいるはずの職員のことが気になった。野田沢地区の住民約８０人は集落の西側にある県道の旧バス停付近に集まって、ほとんどの人が車の中で震度６弱を２回経験した。「ドドドン」という、突き上げるような衝撃と波打つというか、船にでも乗っているような感覚を今でも覚えている。

それから、夜が明けてくると、妙に明るく照らす太陽が真っ白な雪に反射し、キラキラして、回りの景色がとてものどかで、非日常的空間にいる自分とどこかアンバランスだった記憶が鮮明にある。車の中で、ただ漠然とこれからどう

なってしまうのだろう、などと考えるが悪夢の中にいるようで頭の中には浮かびあがるものは何もなかった。それにしても幸運は震災当日の天候に恵まれたことだろう。雪でも降られていたなら、精神への打撃はもっと徹底的に大きかったはずだ。

村内に７カ所の避難所が設置された。特別養護老人ホームの①「フランセーズ悠さかえ」②箕作集落センター③栄村役場④北信小学校（現栄小学校）⑤栄中学校ランチルーム⑥北野天満温泉⑦東部小学校で３月１２日の夕方までに１，５１９人が避難した。３月２９日には各集落の水道の復旧も進み四カ所の避難所が閉鎖され、三カ所での避難者数は２３１人となった。その後全ての避難所が閉鎖となったのは６月２０日である。役場職員は避難所の設営、食料や寝具の手配、給水、仮設トイレの確保など懸命なる対応を見せてくれた。消防や警察の皆さんも地域の安全確保に昼夜を問わず取り組んでいただいた。また避難所となった学校では様々な面において、住民と関わる教職員の献身的な活躍があって避難所を支える大きな力となっていただいた。だが、日がたつに連れ、やり場のない怒りや悲しみ、不安、情報不足、などから、住民のいらだちも、役場職員の疲れもピークとなって、一時の職員会議などは耳を覆いたくなるほどの冷静さに欠けるというか、組織的な機能の崩壊を感じるような場面もあった。非常時における指揮系統の難しさを痛感したものである。現場では判断して、決断しなければならない。その場その場での柔軟性も必要だ。それには、指示と権限を明確にしておかなければならないし、日頃から、職員の個性、適材適所を見極めておかねばならない。次々といろいろなことがあって、どうにもならないこともあったが、時間の経過と共に理性的な部分の回復もされてきたものと思っている。

地震による直接人的被害は１０名程でいずれも軽傷であった。住家の被害は全壊が３３棟、半壊１６９棟、一部損壊が４８０棟で、車庫や倉庫、土蔵等を含めると家屋全体の被害は千棟近くになる。水道は秋山地区を除くすべての集落で断水となり、全集落が給水可能となるまでに２５日間を要した。森地区の農業集落配水施設も被害が甚大で復旧までに一ヶ月以上かかった。森地区の住民は水道が使えるようになっても下水管が使用出来ずに避難所生活が長引く結果となった。電気も一時停電となったが青倉など一部集落を除きその日の内に復旧した。国道１１７も青倉の栄大橋と北澤橋の被害が大きく、６月３０日まで大型車両の通行ができなかった。県道の被害も大きく、長瀬横倉停線「かいまわり坂」が通行できるようになったのは４月末日だ。箕作飯山線の清水河原スノーセットが通れるようになるのは１０月下旬になるらしい。幹線村道や地区内道路も元に戻るには少し時間が必要だろう。ＪＲ飯山線は横倉駅と森宮野

原駅の間で線路が一部宙づりとなったが４月２９日には運転が開始され、その復旧のスピードに多くの村民が驚かされた。秋山郷は今回の地震で大きな被害を受けることはなかったが、観光客の足が遠のく事態は予想どおりで屋敷温泉の女将さんは、「嫁いでから何十年にもなるがこれほどお客様の少ないことは初めて」と嘆いておられた。農業関係被害も２０数億円になると言われているが、復活への知恵とパワーは残されていると思っている。

教育施設も甚大な被害を受けた。義務教育関係では、栄小学校が体育館天井部分の鉄骨接合部破断、プール槽本体、給排水管の破損、校舎の外回り舗装の陥没、運動場の沈下等々、栄中学校においても、程度の差はあれ、ほぼ似たような状態である。横倉教員住宅も半壊となったため移転新築の計画で、災害査定時の義務教育関係当初申請額は１億３千万円ほどとなった。また社会教育施設では栄村文化会館の電動移動席や音響関係の被害で３百万円余、旧東部小学校体育館は天井の落下、壁面の亀裂などで３千３百万円、横倉の農村広場では、のり面の崩壊や園路の亀裂、沈下で７百万円程になって、社会教育施設で約４千３百万円の申請額となった。栄小学校の体育館、中学校のプールはさらに被害調査を継続して、二次査定に持ち込まれることになった。平成になって文科省関係の災害査定など職員も全く経験のない中で、設計業者、県教育委員会のサポートもあってのことだが査定率が９０％を超えたことは、職員の結束力の賜と感謝すると同時に職員のさらなる成長に繋がるものと信じたい。

この度の震災では多くの皆さんから、たくさんのご支援と暖かい激励をいただいた。感謝の気持ちでいっぱいである。これほどまでの応援に、なにか目の覚めたような思いでもあった。起きてしまったことはどうにもならない。最近になって、ようやく、あたらしい将来の自分の形のようなことについて、少しばかり考えられるようになってきた。実は震災から五日後の３月１７日に初孫ができた。この人の誕生がかなり利いた。それから、あらためて妻と三人の子ども達、母親、親戚、友達、先生方と本当に多くの皆さんからの励ましがうれしかった。そろそろ「震災のおかげ」みたいなものを感じる余裕を持ってもいいと思っている。

教育長　宮川幹雄

総務課
総務課長